

水泳4種目出場 全盲の小野選手

挫折乗り越え夢の舞台へ

障害者スポーツの祭典「第14回パラリンピック・ロンドン大会」が29日(日本時間30日朝)に開幕する。十勝からは水泳4種目に全盲の小野智華選手(17)＝北海道高等盲学校3年＝帯広盲学校出＝が出場する。小野選手は小学1年から帯広の森市民プール・スインピアを練習拠点とし、両親や熱心な指導者の下で国際クラスの選手にまで飛躍した。数々の挫折を乗り越えての夢の舞台挑戦に、両親や支援者は温かく見守っている。

パラリンピックあす開幕

小野選手は障害区分S11クラス(矯正視力0)で、31日に100メートル自由形(世界ランキング15位)、9月1日に50メートル自由形(同17位)、同2日に100メートル背泳ぎ(同7位)、同8日に200メートル個人メドレー(同16位)に出場する予定。4年前の北京五輪では、得意の背泳ぎ種目が無くなるという

予期せぬ事態が起き、一時は選手生命が危ぶまれたが、今大会は種目が復活し、4年越しの五輪初出場を果たした。小野選手は1994年、父紀晴さん(47)と母薫さん(46)の次女として生まれた。釧路から帯広に移り、小学1年時に帯広で身体障害児の水泳教室を開いていた市内の元教諭真田正樹

さん(66)と出会った。真田さんは小野選手が泳ぎ始めた頃、自由形のスタート時に恐怖でプールに飛び込めない小野選手の姿が印象に残っている。真田さんにとって全盲の教

え子は初めてで、手探りの指導。これができない限りこれ以上うまくならない。一つの壁だけと感した。水中で始める種目と異なり、暗闇の中でジャンプ台から「未



両親、指導者ら健闘祈る

知の世界」に飛び込むことがどんなに恐怖だったか。できるまで結局4時間かかった。真田さんは「自分を信じてやればできることを教えてくれた」と語り、代表を務める十勝地区障がい者水泳懇話会の会報(月1回発行)に「トライ」と名付けた。帯広水泳協会の小柴満会長(63)は「智華ちゃんは札幌に進学したが、最初は思うように練習できず(競技を)諦めかけたこともあった」と振り返る。母薫さんが週末に札幌まで迎えに行き、帯広で練習後、日曜日に札幌に送る日々が続く。再び力を入れ始めたという。「ロンドンでは今までの努力を無駄にしない結果を出してほしい」と語る。紀晴さんは「娘はプレッシャーと不安が大きいというが、まずは楽しんできてほしい」、薫さんは「親としては本人が納得できるレースであれば十分」と健闘を祈り、ロンドンに向けて28日出国した。(中津川甫)